

バレーボールのオーバーハンドパス動作 における動感化能力の研究

足 立 学

I 緒 言

学校体育授業におけるバレーボール指導において、学習者へのオーバーハンドパスの基本技術指導は難しいとされている。一般的にバレーボールを楽しむ上で、このパス技術を習得していなければ、バレーボールの本質や独自の面白さを味わうことはできない。バレーボールの本質的な楽しさとは、攻防（ラリー）を続けることや、三段攻撃による得点を得ることにあり、オーバーハンドパス技術を習得することによりボールを正確に味方に送り、そのボールを味方の攻撃となるスパイクにつなげるための「トス」を行うことで競技性はより向上することになる。

指導実践現場において、学習者のオーバーハンドパス技術の習得が難しいとされる原因は、次の二つが考えられる。その一つは、パス時にボールがあたる衝撃による指先の痛みから、その練習が敬遠されがちなことである。パスを行う際、遠くに飛ばそうとしたり、高く上がったボールを打ち返そうとした時に突き指をすることが多く、「痛み」を感じることになる。二つめは、従来の運動指導法に対する問題である。三木¹⁾によれば、「従来の指導法は、運動感覚的な動きを覚えさせるための学習指導と、技術ポイントとその手順を示して学習活動を効果的にマネジメントする学習指導との区別がついておらず、時には学習計画を子どもに提示しただけで終わって

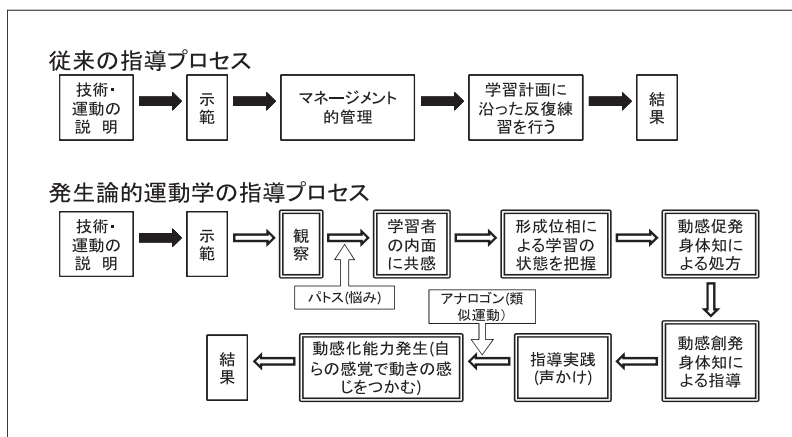


図1 従来の指導と発生論的運動学の指導比較

しまうケースが多く見られる。」といている。その結果、学習者は自らの動きの感じ（動感）を発生することなく、動きの本質を味わえないまま学習を終えていたと考えられる（図1「従来の指導プロセス」）。

この原因を回避し、よりバレーボールに親しむためには、指導法の工夫が必要である。そこで、学習者自らの感覚で動きを覚えることのできる指導理論、金子の発生論的運動学に着目した。発生論的運動学とは、従来の運動指導では難しいとされていたコツやカンの習得について、主体となる学習者が自らの感覚で運動を覚えること、すなわち、自分の身体で動き方のコツが「わかる」ようになり、同時に動きのかたちが現れ、運動が「できる」ようになっていく出来事に関する動感化現象の理論である（図1「発生論的運動学の指導プロセス」）。三木²⁾は「運動学習にとって最も大切な「できる」ようにするためには、どうしても自分の身体の動かし方のコツがわかる学習、すなわち、子ども側に立った運動感覚能力を育てる動きの学習を問題にしなければならないのである。そこには、運動感覚的な指導理論としての動きの発生論的運動理論が欠落していたのである。」といい、技術習得に必要な『動感化能力（私の動く感じ）』を発生・充実させることの重要性を説いている。

そこで、本研究では、この発生論的運動学の指導法及び重要概念を整理し、バレーボールのオーバーハンドパス技術の基本構造を明らかにした上で、パス動作に必要な動感化能力の抽出を試みた。本研究において抽出された動感化能力は、今後の指導実践現場において、動作分析及び、ドリル作成に大きく貢献されることが期待できる。

Ⅱ 研究の方法

1. 「発生論的運動学」に関わる諸概念について

対象：発生論的運動学の著書及び学術論文。

分析：著書及び学術論文を読解、分析し、発生論的運動学の概念整理。

2. オーバーハンドパスの技術構造について

対象：オーバーハンドパス技術に関する著書及び学術論文。

分析：著書及び学術論文より、オーバーハンドパス技術構造を整理。

3. オーバーハンドパスに必要な動感化能力の抽出

Ⅲ 研究の結果及び考察

1. 「発生論的運動学」に関わる諸概念について

1) 発生論的運動学の概念

この運動学は、金子が K. マイネル著「Bewegungslehre」を翻訳した「スポーツ運動学」を出版したことに始まった。その後、金子は、「発生論的運動学」の体系化を試み、2002年の「技の

伝承」、2005年には「身体知の形成」(上・下)、2007年に「身体知の構造」を発刊し、発生論と構造論、そして伝承論という三重の塔としての運動理論が構築したのである。そして、2009年には金子運動学の集大成として「スポーツ運動学」^{注1)}が世に出されたのである。

このスポーツ運動学は、目的論を基に身体知の発生や技の伝承を分析し、その原理や本質・法則を解明するために体系化された運動理論を目指したものである。金子³⁾は、「身体知分析論としての運動学の構図は、スポーツ領域における身体知発生の地平構造を明らかにし、身体知伝承を活性化する方法論を探ることにある。ここでの身体知発生とは、身体知発生という時の身体は生理学の分析対象となる物質身体ではない。その発生という表現も分子生物学的な個体発生が意味されるものではない。ここで用いられている「身体知発生」という時の身体(ビュシス)とは、オーストリーの精神神経学者アウアスペルク⁴⁾の表現を借りれば「生き生きと体験しつつある身体なのであり、心を排除するのではなく、それを現出している」身体が意味されているのである。身体知は運動と知覚の統一体として動感化能力に支えられ、有意義な実存運動としてその統一的意味形態を成立させることになる。」と論じた。この新しい身体知発生論こそが、スポーツ運動学の中核を占めることになり(その他に、目的論や感覚論がある)、これこそが金子の解く身体知の発生となる発生論的運動学の始まりなのである。発生論的運動学における身体知とは、身体と心が一体化することにより、運動様態が表現されるものであると考えられ、運動の本質を知るには、この知覚的な運動感覚や運動を覚えるためのプロセスを知ることが必要なのである。時には、一つの技術を習得するために、身体の反応・反射運動となる反復練習なども必要とされるが、やはり運動そのものを理解するためには、学習者自らの内面にある動きの感覚(動感)を発生させ、運動として表面化することが発生論的運動学の目的なのである。

また、指導者が学習者の状況を把握するために金子⁵⁾は、「〈生きられる〉動きは〈自己運動〉として、〈今・ここ〉という〈身体性〉のなかで動きの〈かたち〉を成立させることができる。しかし、そこには、「やろう」としても「できない」というパトスの運動の世界が存在するのである。」といい、ここでは学習者がどこでつまずき、思い悩んでいるのか、その学習状態を知る必要があるとしている。そこで、発生論的運動学では学習者の学習状態を五つの段階に分け、把握することとしている。金子は、これを「動きの形成位相」とした。

2) 学習者の学習状態を知るための「動きの形成位相」

発生論的運動学では、指導する際の学習者の学習状態を把握するために「動きの形成位相」という五つの状態を示している。学習者は、目の前に提示された動きに対し「やってみよう」と思うようになり、その動きを自分の持っている運動感覚と運動能力を統覚させ動きを成功させようとする。そこで、偶然的にも「できた」と動きを感じ、その偶然が何度も繰り返すことによって自らの動きとなり、自由自在に動くことができるようになる。この一連の流れを、動きの形成位相といい、学習者の状態を五つの位相に分け、動きを覚えるためのプロセスを示したものが図2となる。

表1は、金子が示した五つの各位相について、三木⁶⁾が詳細説明をしたものである。

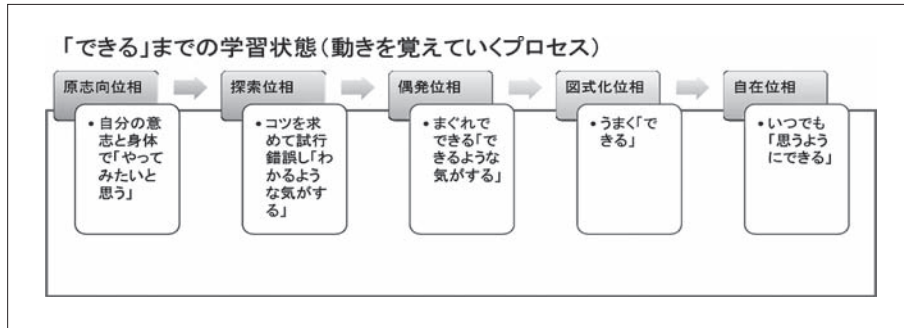


図2 動きの形成位相 (三木の動感化能力養成研究会資料より)

表1 五つの「動きの形成位相」

- 原志向位相: 目の前に示された運動に対して感情的に嫌ではないというかたちで、すでに運動感覚的に動き方に共感が生じ「やってみよう」と思う状態にある。
- 探索位相: 私のアナログン(類似)的動きを駆使して探りをいれ、運動感覚の触手を伸ばして動き方を探索する。なんとなく「わかるような気がする」という状態にある。
- 偶発位相: はじめて「できる」ときであり、偶然に「コツをつかむ」ことである。何となく「できそうな気がする」という身体状態感をもって、コツをつかむためにまぐれ当たりの頻度を高める状態にある。
- 図式化位相: 「思うように動くことができる」感じに出会い、コツは身体化される。さらに、コツの危機、修正や技幅への志向などに向かう状態にある。
- 自在位相: 自在に動けるということ、他者とのかわりの中で自ら動くのに何の心身の束縛も障害もなく、感性(むだがなく、安定し、即興的な動き)や体感能力(気配を感じ、状況に応じる動き)など、動きと合体した心の持ち方へ「いつでも思うように動くことができる」の志向状態にある。

図2及び表1を解説すると、学習者は、原志向位相の状態において「動きをやってみよう」と試みる状態であり、探索位相では「一生懸命自分の持っている能力を最大限に活用して運動を行おう」としている状態である。ここで優れた運動感覚・運動能力を持った者は、何事もなく偶発位相によってまぐれで一度でき、それを何度も繰り返すことで図式化位相へと思うように動くことができるようになるのである。そして自在位相では、自分だけの動きではなく他者とのかわりを伴うゲームなどでも自在に動くことができるようになる、これが運動を覚えようとする学習者の状態を示すものである。しかし、学習者が全ての運動に対し、最終段階の自在に動くまで達成するとは限らない、時には「できたような気がする」になかなか遭遇することができず、パトス的な状態に陥り、そのまま運動を終えてしまうと、「体得できない」「できなかった」という結果になるのである。そこで、動きを覚えるために動感創発身体知を活用することになる。

3) 学習者と指導者に必要な身体知の形成「動感創発(覚える)身体知」

動感創発身体知とは、動きを覚えるための身体知であり、運動を覚える学習者にとっても、運動教える指導者にとっても必要とされる身体知である。この身体知は、四つの身体知で構成され、次のとおりとなる。①今ここの時間や空間を感じて動きを覚える始原身体知、②目的とする動きのかたちを作り出すことのできるコツ(「私が動くことができる」という私の身体そのもの

の向けられた動き方)やカン(場の状況を先読みすることができ、それに応じた動き方を選び、判断して実行に移せる)を覚える形態化身体知、③より上位の身体知を求めて、洗練化のために修正する機能を持ちながら新しい動き方を生み出す洗練化身体知、④動感化能力に修正を加えながら動きを覚える修正化身体知がある。これらによって構成される各身体知は、さらに細分化され、運動が始まる準備段階(体感身体知の定位感能力・気配感能力)から動きの微妙な変化や最終的な修正までを細かく分析できるようにしているのである。

動感創発身体知の四つの身体知により、自らの感覚で動きを覚えたり、自らの能力によって動きに修正を加えることにより、動きの本質を味わうことができるのである。指導者は、学習者がどの動きの形成位相の「できる」を目指して学習をしているのかを知り、動感促発身体知(以降で説明するが、指導者が教えるための身体知で、主に観察をしたり、交信をすることによって学習者の状態を知り、代行によって学習者の間違った動きを知らせたり、動きを教えるための身体知をいう)によって学習者がどのような動感創発(覚える)身体知が空虚で充実していないのかを見抜かなければならない。その結果、学習者のパトス的狀態を回避するために、指導者は自らが知り得た運動(コツ)や経験を駆使し、動きを覚えようとする学習者への支援・援助行為を繰り返すことになる。それには、細かく区分される動感創発身体知の各能力による分析と、それを理解した上での指導プログラムの作成及び綿密な指導計画が必要となるのである。

4) 指導者に必要な身体知の形成「動感促発(教える)身体知」

発生論的運動学における、動きを教える能力は「動感促発身体知」と呼ばれ、指導者にとって最も重要な能力であるとされている。動感促発身体知は、指導者自らの経験や自らが体得した動きのコツを指導に活かし、学習者自身の動感化能力を発生・充実させることで、技術習得へと導くものである。

指導者に必要な動感促発身体知を細分化すると、大きくは二つの身体知に分けられる。一つめは、動きのかたち(形態化)を成功させるための動感素材(動きの感じの材料になる運動)を収集するための素材化身体知と、二つめは、学習者の動感化能力の世界に自己移入して、学習者の形態発生に受け入れられるような方法を新しく生み出していくための処方化身体知が存在し、学習者の学習状態を見抜き教えるための身体知なのである。図3は、三木が「動きの形成位相」「動感創発身体知」「動感促発身体知」を活用し、発生論的運動学の指導プロセスを説明したものである。

5) 発生論的運動学の分析方法

金子⁷⁾は、「発生論的運動学の運動分析方法として、構造分析・形態発生分析・促発処方分析の三つを挙げ、さらに学習者の動感発生を促すためには、動感素材を收拾するための素材分析身体知と、それらの素材に意味づけをして形態発生に導く処方分析身体知が、指導者には求められる。」と述べている。構造分析とは、私たちが目標とする習練形態(運動、技、かたち)は一つのまとまった構造を持っており、その習練形態がどんな意味構造をもち、どんな動感形態(動きの感じによってかたちつくられ、一つのまとまった動きかたになる)が目標とされているのか指

発生論的運動学の指導プロセス

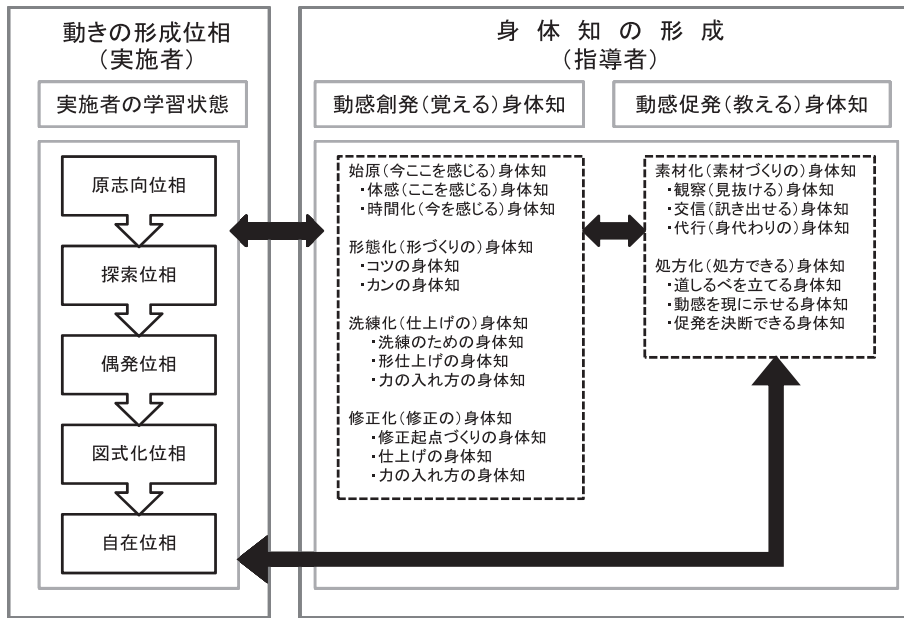


図3 発生論的運動学の指導プロセス（三木の動感化能力養成研究会資料より）

導者にも学習者にも共通に動感構造を理解しておく必要があり、そのための分析方法である。形態発生分析とは、動感形態の生成消滅の出来事として受動発生のレベルも含めて分析対象とし、どんな動く感じをもって学習者に動感形態を発生させるのかを形成位相との関連で分析するための方法である。促発処方分析とは、動感形態をどのように学習者に伝えるか、伝承のために分析を進める方法である。また、金子の著書⁸⁾「わぎの伝承」では、発生論的運動学の分析方法において、「運動感覚論的な発生分析では、運動学習者のもつ動感創発身体知と、指導者の動感促発身体知の発生分析がもっとも重要である。」としている。

このように、金子の発生分析の方法に基づき、習練目標の構造分析を行い、学習者がどの学習状態にあるのかを動きの形成位相から把握し、指導者の動感促発身体知によって学習者の動感創発身体知がどのように発生・充実させられ、学習者自らの感覚で動きを覚えられるかが、この運動学の焦点となるのである。

2. オーバーハンドパスの技術構造について

1) オーバーハンドパスの重要性和緩衝動作

進藤⁹⁾は、バレーボールの本質・独自の面白さは、「ネットにより分離された競技空間におけるボールを介した攻撃・防御空間と攻撃・防御時間の争奪」であり、その実体は「攻撃と防御の相互の目的意識的な集団的戦術（コンビネーションプレー）の行使による攻防（ラリー）」にあるとした。このコンビネーションプレーによるラリーに欠かせない技術と言えば、オーバーハ

表2 ゲームにおけるオーバーハンドパスの役割

【オーバーハンドパスの役割】

ファーストコンタクト：レセプション（サーブレシーブ）やチャンスボールの処理

セカンドコンタクト：トス（オープントス、時間差攻撃トス、速攻トス、バックトス、二段トス）

サードコンタクト：パスアタック

ンドパスであり、その役割を表2で示した。

主にオーバーハンドパスは、セッターによるセカンドコンタクトで最も使われ、ここでのトスアップが成功すれば、攻撃（スパイク）につなげることができる。従って、バレーボールにおいてゲームメイクするためには、オーバーハンドパスは必要不可欠な技術とされ、独自の本質を味わったり、楽しむ上でも、オーバーハンドパスの技術習得は必要なのである。

また進藤⁹⁾は、オーバーハンドパスは、ボールを味方に送るための技術であることから、「味方の次の攻撃的プレーの最善の行使を可能にするための緩衝を伴った柔らかいボールの目標空間への送球動作」が必要とされるとしている。ここで、緩衝動作による柔らかいボールが、味方のプレーを競技的に面白くしたり、チーム力やパフォーマンスを上げる要因へつながることがわかる。この緩衝動作とは、手の中で一瞬止まったような感じから、音がすることもなく、ボールが送り出されることをいい、バレーボールの専門用語では「ハンドリング」とも表現されている。このハンドリングは、バレーボールの熟年者こそが持ち得るコツ（技）であるとされ、体育授業などの短時間でハンドリングを習得させることは難しいとされている。しかし、緒言でもあげた、オーバーハンドパスは突き指をしやすく「指が痛い」と嫌われたり敬遠される例からしても、この緩衝動作を指導者が教えることができ、学習者が習得することができれば、「痛い」という悩みを解消し、多くの人々がバレーボールを楽しむことができると考えられる。

2) オーバーハンドパスの局面構造

三木¹⁰⁾は、ヴァイツゼッカーの言葉¹¹⁾を引用しながら「人間の生命ある動きは、勝手に分割線を入れられないゲシュタルト（ひとつのまとまりをもつかたち）として、部分は全体に、全体は部分に密接なかかわりをもつ構造によって成り立っているとしている。それは、自分の運動感覚意識によって動きを「自分から考えてみる」ことで、はじめて局面を区分することができるのである。」と論じた。従って、指導者がこの局面の区分を理解するには、まず学習者の運動感覚意識に共感することが重要となり、共感するためには指導者の動感交信身体知が必要と考えられる。ここでも、主体は学習者であり、常にその状況を知っておかなければならないのである。

マイネル¹²⁾は、動きの中身を、機能的な役割をもつ三つの運動形態①非循環運動、②循環運動、③組み合わせ運動に分節をし、さらに一つの運動を①準備局面、②主要局面、③終末局面の三つの局面に分類している。これを局面構造というのである。局面構造を特徴づけるための運動形態では、バレーボールのオーバーハンドパスにおける一回のパス動作は、非循環的であり、非循環運動に属することになる。また、マイネルによると、非循環運動における局面構造は、表3のように動きの機能が分類され、表4ではさらに一つの運動を三つの局面構造に分けることがで

表 3 局面構造における三つの運動形態

- ①非循環運動：投げること、走り幅跳びや逆上がりなどのようにひとつのまとまりをもつ動きで、ある課題を解決することのできる運動のことをいう。ここでの運動感覚意識は、はじめと終りが意識され、さらに動きに違和感を感じたり、中断すると失敗したという意識を持つのである。
- ②循環運動：走ること、泳ぐこと、縄跳びなどのように、同じ動きが繰り返して行われる運動のことをいう。この循環運動も一回性と発生の原理に基づき、常に完全な同じ運動が繰り返されるのではない。縄跳びでは、一回一回にリズムやタイミングのずれがあったりして、たえず修正を加えながら跳び続けようとする運動感覚意識が働くのである。
- ③組み合わせ運動：ボールを受けて投げることやマット運動での技の組み合わせなど、2つあるいはそれ以上の異なる運動を連続して運動を行うことをいう。ここでの運動感覚意識としては、「～しながら～する」といった、先行する動きのなかに次に続く動きの先読みとして「感じの呼び込み」がある。そして、まだ行われていないその動きに対しての価値意識もともなうのである。すなわち、次に続く動きを「上手に動きたい」とか、「美しく」「かっこよく」という意識である。

表 4 三つの局面構造

- 準備局面：言葉のとおり主要局面での動きを準備するための動きである。それによって、主動作の動きをスムーズにしたり、必要なエネルギーをもっとも効果的、経済的に作り出したりする働きを持つのである。特徴としては、ボールを投げるとき、手を後ろに引きこみ、主動作に対して反対方向にまず動作を行ったり、跳び箱運動や走り幅跳びなどのように、主動作と同じ方向で行われる助走、予備踏み切りなどもある。ここでは、「～のために、～しようとする」という運動感覚意識が働くのである。
- 主要局面：運動の中核をなす局面で目的を達成するための課題を直接解決することになる。課題によっては、独自の動き方が求められ、他の運動と区別することができる。例えば、オーバースローとアンダースローなどの投げ方に区別される。運動感覚意識として「～する」となるのである。
- 終末局面：主動作は急に終わるのではなく、余韻を残しながら今まで入れていた力を抜き、バランスを保ちながら終わる局面を指し、「～した」という運動感覚意識を持つことになる。

きる。

次に、局面構造からみたオーバーハンドパスの基本技術について、進藤¹³⁾は、パス（トス・レシーブ）の基本的運動構造と技術の二種類のパスについて、ある時間的空間的経過の中で一回で終了する非循環運動（非周期的運動）であり、どんなパスもある一定のまとまりのある運動構造

表 5 オーバーハンドパスの基本的運動構造と各局面の技術（進藤の構造分析より）

- 準備局面：予想するボールの落下位置に確実に入り、膝をやや曲げた状態で両腕を顔の斜め上方に挙げてボールを待つ姿勢から、落下に合わせた手首・肘・膝の関節の屈曲によりボールを顔の前まで呼び込み、ボールが一瞬とまるまでの局面である。
- 主要局面：ボールが一瞬とまった瞬間から、身体各関節、すなわち、足首・膝・腰・肩・肘・手首の各関節が十分に伸展し、ボールが目標に向かって押し出され、指先からリリースされるまでの局面である。（飛来するボールと指先との間で生じる衝撃をいかに和らげるかというボールに対する“緩衝動作”が重要）
- 終末局面：ボールをリリースした後の運動を消失させるまでの局面であり、リリース後すぐに元の姿勢に戻るのではなく、約1・2秒両足と腕はほぼ真っすぐになるまで伸ばし、伸ばした両手をはなせずにむしろ、やや接近させる。意識を焦点づけることによって力がボールの中心から分散しにくくなる。その後、身体全体の筋の緊張を徐々に解く。

を持っている。それは、運動を準備する準備局面、目標に正確にボールを送るという運動課題を実際に直接的に解決するための主要局面、そして運動を終了させる終末局面という三相の基本的運動構造から成り立っていると論じた。進藤が、オーバーハンドパスの各局面において、実際の動きを示したものが表5である。

このように、オーバーハンドパスの動きの意味構造を分析することにより、パス動作における動きの流れが明らかとなった。最後に、発生論的運動学の動感発生において、オーバーハンドパスの動きを習得するのに必要とされる動感化能力をあげることとする。

3. オーバーハンドパスに必要な動感化能力の抽出

発生論的運動学の指導法において、学習者の動きの感覚（動感化能力）の発生こそが技術取得につながるとされていることが前文でもわかったが、動感化能力について説明をする。金子の発生論的運動学では、実施者が運動をできるようになるためには運動感覚能力が最も重要であると説いている。それは、フッサールの造語によるキネステーズ、つまり運動（キネシス）と感覚（アイステーシス）の不可分（密接に結びついていて、分けたり切り離したりできないこと）な結合としての「運動感覚能力」を意味している。これを「私の動く感じ」動感化能力という。つまり、この動感化能力は、学習者自身が動きの感じを読み取り、感覚として習得した上で自らの身体を思いのままに動かすことにあり、決して与えられたものではないのである。オーバーハンドパスの技術習得においても、学習者自らの動く感じをもたせるために、その動きに必要とされる動感化能力を発生させることは有効であると考えられる。

動感化能力は、動感創発（覚える）身体知の中で構成される22種類（定位感能力、遠近感能力、気配感能力、直感化能力、予感化能力、差異的時間化能力、触発化能力、価値覚能力、共鳴化能力、図式化能力、伸長化能力、先読み能力、自在化能力、調和化能力、解消化能力、動感分化能力、局面化能力、再認化能力、優勢化能力、リズム化能力、伝動化能力、弾力化能力）が存在し、この中からオーバーハンドパスの技術習得に必要とされる動感化能力を表5の基本的運動構造より抽出した。抽出された動感化能力は、以下のとおりとなった。

- ①オーバーハンドパスを行う場合、他者から送り出されたり飛んでくるボール（サーブ、レシーブなど）の落下位置・角度などを予測して動くための予感化能力。
- ②予感化能力と同時に、ボールと自分の位置を判断し、空間的な近さや遠さ時間的な短さや長さを感じ取るための遠近感能力。
- ③9m四方のコートの中、もしくは体育館全体の中での自分の位置感覚を持つために、自分の身体の中に絶対ゼロ点をおき、空間での位置感覚を知ったり、体勢のとり方を考えるための定位感能力。
- ④オーバーハンドパスは、バレーボールの技術の中でも、最も自由自在にボールを操る技術であり、ボールを操るための自在化能力。
- ⑤ボールを押し出す動作、及び押し出した方向に余韻を残し方向を定めるための伸長化能力。

⑥指・手首・肘・膝からの力を、ボールに伝えるための伝動化能力。

⑦オーバーハンドパスをする上で、体全体のタイミングやリズムを整えたり、次への動作など全体の動きを整えるための調和化能力。

⑧自分自身の「今、動いた感じ」をとらえるための直感化能力。

以上の八つの動感化能力を自分の感覚としてつかみ取ることができれば、オーバーハンドパス動作において、ボールを自由自在に操ることができるようになるのである。

さらに、発生・充実することができた動感化能力に対し、動きの目標となる自由自在に動けるようになるために、三木¹⁴⁾は、「動き方の学習は、運動が「できる」ようになったからといって、決してそれで終わりになるものではありません。運動が「できる」ということは、いつでも、どこでも、「私は思うように動くことができる」という、運動習熟の図式化位相（いつでもできると確信が持てるような位相）にまで高める必要がでてきます。さらに、スポーツを楽しむために周りの状況に応じて、他者とのかかわりのなかで「私は自在に動くことができる」という自在位相を目指すことになります。このような動きができるようになるためには、動きを改善（修正化能力）したり、いろいろな状況の中で、上手に動けるという運動形成の位相に応じた運動感覚能力（私はそのように動くことができる）をどうしても獲得しなければなりません。」とし、動感化能力に何度も修正を加え改善することによって、より高度な技術を獲得することができると論じた。

IV 総 括

本研究では、金子の発生論的運動学の指導法と構造分析を基に、オーバーハンドパスに必要な動感化能力を抽出したが、この運動学による指導法は、一般的に器械体操で用いられているものである。しかし、「主体を学習者に置く」という手法が、スポーツ指導の観点より、どの運動・競技種目にも共通するのではないかと考え、筆者自身の専門であるバレーボール種目の実践指導において取り組むこととしたのである。

この発生論的運動学は、金子が説くスポーツ運動学理論の中核を占めるものであり、その指導法は、「主体を学習者に置き、学習者が動きに対して、どのような悩みを持っているのか、動感促発身体知により情報を知り、学習者の内面（悩み）に共感することにある。」次に、「その悩みの状態（段階）を、動きの形成位相のどの段階にあるのかを、動感促発（教える）身体知により分析し処方する。」そして、「動きの悩みを解消するために処方した結果を、動感創発（覚える）身体知によって、動きの感覚（動感化能力）を発生させ、自らの感覚で運動を覚える。」これが、この運動学の指導プロセスなのである。もう少し分かりやすく説明すると、「悩んでいる学習者の内面に入り込み、悩みの入り口の状態（探索位相時）にアプローチし、自らの感覚で運動を覚えさせること。」であり、単に指導者が運動形態を示し反復練習を繰り返しさせるだけの指導法とは異なるものである。

本研究の動感化能力の抽出を行った結果、学習者のオーバーハンドパス技術の習得が難しいとされていた原因となる「痛み」を解消することだけでなく、抽出された八つの動感化能力をドリル化することによって、より高度な技術習得が可能となり、学習指導要領保健体育の体育分野球技「ネット型スポーツ：バレーボール」の最終目標である戦術・戦略を学ばせることへもつながることが期待される。今後、バレーボール種目において、オーバーハンドパスだけでなく、アンダーハンドパス・スパイクなどの動感化能力を抽出した上でドリル化し、発生論的運動学の指導法及び動感分析を合わせ、学校体育現場で活用できる練習法の研究を進めることとする。

注

注1) 金子明友の著書「スポーツ運動学」(2009年明和出版)は、現象学的形態を基礎に据えた身体知発生論の入門書である。その副題に「身体知の分析論」を掲げ、スポーツ領域における動感化能力の発生論的運動学を説いたものである。

参考文献

- 1) 三木四郎 (2005)「新しい体育授業の運動学」明和出版：p.29
- 2) 三木四郎 (2005)「新しい体育授業の運動学」明和出版：p.55
- 3) 金子明友 (2009)「スポーツ運動学」明和出版：p.5
- 4) Auersperg, Alfred P.: Vorlaufise und rucklaufig Bestimmung in der Physiogenese; Jahrbuch für Psychologie, Psychotherapie und medizinische Anthropologie, 8-1961, S.226
- 5) 金子明友 (1996)「教師のための運動学」大修館書店：p.6
- 6) 三木四郎 (2005)「新しい体育授業の運動学」明和出版：p.54
- 7) 金子明友 (2005)「身体知の形成 (上)」明和出版：p.93
- 8) 金子明友 (2005)「わざの伝承」明和出版：p.460
- 9) 進藤省次郎 (2007)「バレーボールのパスの教材構成と教授プログラム」北海道大学大学院教育学研究科紀要 第101号
- 10) 三木四郎 (2005)「新しい体育授業の運動学」明和出版：p.70
- 11) ヴァイツェッカー (木村, 浜中訳 1995)「ゲシュタルトクライス」みすず書房
- 12) クルト・マイネル (金子訳)「マイネルスポーツ運動学」大修館書店：pp.156～165
- 13) 進藤省次郎 (2003)「バレーボール初心者に対するパスの技術指導」北海道大学大学院教育学研究科紀要 第89号 p.59
- 14) 三木四郎 (2005)「新しい体育授業の運動学」明和出版：p.10

〔あだち まなぶ スポーツ運動学〕